

第1回戦災資料の収集と展示等のあり方検討会 議事概要

1 日時

令和8年6月5日（金） 13:00～14:00

2 場所

富県民会館 401号室

3 内容

(1) 委員紹介・座長選出

全会一致により、東京大学名誉教授の西村委員を座長に選出

(2) 戦災資料の現状及び戦争の記憶継承に向けた県の取組み等について

事務局より、資料に基づき説明

【委員からの主な発言】

○委員

- ・戦後約80年が経過し、遺族の中でも戦争に対する考え方が多様化している。こうしたなか、何らかの形で戦争の記憶を継承していくためには、遺族会や教育現場に限らず、全体として最善の方法を検討していく必要がある。
- ・富山市と他の市町村とでは戦争の被害状況に地域差が存在するものの、富山県全体として、このテーマについて考えていくことが重要である。

○委員

- ・戦災資料の保存を求める最大の目的は、二度と悲惨な戦争を繰り返さないためであり、そういった教育を徹底するため。次世代の子供たちへの継承と教育という意味での、戦災資料の保存、そして資料館の設立が必要である。
- ・長岡市の戦災資料館や市民の方と交流を通じて、地域の人々の歴史に対する強い思いが、戦災資料の保存に大きな影響を与えていることを実感した。
- ・戦後約80年が経過しており、戦争体験や資料を継承していくためにはスピード感も必要。
- ・体験談や資料、遺跡などを深く掘り起こし、発信していくための拠点となる組織や資料館の設立が必要である。
- ・富山市の戦災だけにとどまらず、戦後、或いは明治以降の人物や偉人も含めた富山県全体の歴史として捉える博物館が必要であると考えている。その歴史の中で富山市の戦災の悲惨さを伝えることが、子供たちの平和教育に繋がっていく。

○委員

- ・中学3年生から祖父の空襲体験の語り部として活動しているが、話を聞いて、単に「悲しい」と感じるだけで終わってしまうことが最大の課題である。話を聞いたうえで、「自分はどう思ったか」、「二度と繰り返さないために自分たちに何ができるか」を考える思考プロセスが極め

て重要であり、参加者が戦争を自分事として捉えることを促すような講座を実践している。

- ・県の派遣事業の語り部の人数が3名と少ないことが課題である。展示が実現しても、解説や体験を語る人がいなければ、来館者は資料を見るだけで終わってしまう。
- ・戦争が身近ではない世代にとって、話を聞くだけでは実感が湧きにくい。そのため、五感を通じて学べる「体験型」の展示が必要ではないか。長岡の花火大会で実際の空襲警報の音声を流す事例のように、来館者がリアルに体感できる仕組みを取り入れるべき。

○委員

- ・富山市の遺跡調査において、焼夷弾や戦災瓦礫などの遺物を確認してきたが、市街地の民家はほぼ完全に焼失しているため、当時の市民生活を示す資料は非常に少なく、今後の収集は困難である。
- ・そのため、戦災資料（遺物）の収集にとどまらず、戦禍を免れて現存する県庁舎のような建物や防空壕など、目に見える遺構も重要視すべきである。
- ・他県の事例（岡山や前橋）では、専任スタッフや学芸員が配置されており、教育や普及活動といった伝える役割を担っているが、現状として、市には近代や戦争の歴史を専門とし、子ども達へ詳しく説明できる学芸員が不足しているという課題がある。

○委員

- ・富山市では毎年「富山市民感謝と誓いの集い」を開催し、戦争体験の朗読や中学生の作文発表などを通じて、記憶を語り継いできた。
- ・一方で、戦争を知らない世代が大半となり、体験者の高齢化や記憶の風化が進むなか、次世代への継承が困難になっていることは共通の課題である。
- ・戦争の悲惨さと平和の尊さを後世に伝える機会を作ることが極めて重要である。
- ・こうした状況を踏まえ、富山市では、子供たちがいつでも戦災関連の資料を見ることができる環境が大切であると考え、常設展示のあり方について検討を始めたところ。
- ・子供たちが資料を目にして学び、平和への思いを自分事として受け止められる環境をどのように作っていくか、しっかりと考えていきたい。

○オブザーバー

- ・中学校では、修学旅行と連携した平和学習が多く行われており、事前の学習から「平和とは何か」といった問いを持たせる取組を行っている。
- ・小学校では、総合的な学習の時間を活用し、福祉や防災などテーマを決めて、見学や体験を交えながら長期間かけて探究活動を行っている。そのなかで、平和について考えたり、昔の人たちの暮らしの様子を調べたりというようなことに焦点を当てて取り組んでいる学校もある。
- ・学校現場からの平和学習に対するニーズは高いと考えられる。展示施設でどのように発信・紹介していくかが重要である。
- ・展示を行う場合はただ見せて終わりではなく、見学した子供たちの多様な受け止めや感想を蓄積し、可視化して発信していく仕組みがあると良いのではないか。例えば、AIのテキストマイニング等を活用して子供たちの感想を可視化することで、「悲しい」「怖い」といった共通の思いだけでなく、少数の意見にも焦点を当てることができ、それが次の見学者の深い思考や問い

の素材となる。

○委員

- ・現在約 1,000 点の戦災資料を保管しており、その適切な保存と活用が当面の課題である。一方で、複数の委員から出た「ただ展示して終わりであってはならない」という意見に完全に同意する。
- ・展示や保管そのものが目的ではなく、来館者にどのように伝え、胸に刻んでもらうか、さらには来館者自身がその思いをどう次世代へ伝えていくかという視点が重要である。
- ・先行事例である岡山や前橋の資料館を視察した際にも、膨大な資料の管理はもちろんのこと、来館者にどう伝えていくかが課題であると伺った。
- ・富山県内に点在する「ゆかりの地」など、共感を得るための手がかりも生かしながら、「どのように伝えていくか」という観点を重視して今後の検討を進めていきたい。

○座長

- ・若い世代に効果的に伝えるためには、体験型のプログラムやインタラクティブに情報が引き出せる仕組み、前の見学者の感想を共有できるような工夫が求められる。
- ・総合的な学習の時間など学校教育でうまく活用できるよう、1クラス（約 30 人）が 1 時間程度で効果的に学べる展示スペースやプログラムを、教育現場の知見も交えて検討する必要がある。
- ・「戦災」だけでなく「戦災復興」の視点も取り入れるべきである。富山の現在のまちの骨格（例えば、城址大通りなど）が戦災復興によって作られたという歴史をあわせて提示することで、過去の出来事を現在に繋がる身近な問題として実感してもらえる。
- ・より長い歴史の中に戦災と戦後復興を位置づけることで、物語として一体的に語ることができ、教育的にも多様な活用が可能になる。
- ・今後の進め方として、本日の委員からの意見を十分に反映させた原案を事務局から提示してもらい、再度議論・コメントする機会を設けていただきたい。

(3) 今後の検討の方向性について

本年 11 月を目途に方向性を取りまとめることとされた。